



企画展

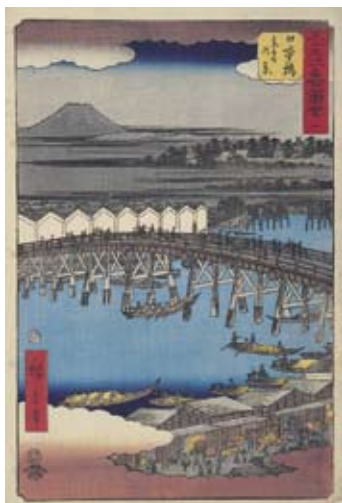
「一保永堂東海道から豎絵東海道」



「東海道五拾三次之内 日本橋 朝之景」(大判 版元：竹ノ内孫八)

いまから約170年前の日本は、鎖国政策のもとで平和を謳歌し独自の文化を築いていました。天保年間(1830～43)の江戸の人口は100万人を越えロンドンやパリに匹敵する大都会であり、西欧のどこの国よりも安全に旅をすることが出来ました。特に東海道は五街道の中でも最も利用された街道で参勤交代、上方との交易や巡礼などさまざまな人たちにより利用されました。江戸から京まで約500キロメートルを成人の男性で約12日間、女性で約14日間で徒歩で旅をしましたが、途中疲れれば馬や籠や舟に揺られ、宿泊する各宿場では名物を食し、旅を満喫したことでしょう。

今回紹介する作品は「東海道五拾三次之内 日本橋 朝之景」



「五十三次名所図会 一日本橋東雲の景」(大判 版元：蔦屋吉蔵)

は、言わずと知れた広重の代表作「保永堂版東海道」のはじまり「日本橋」です。図は、早朝の日本橋を渡り国元に帰る参勤交代の行列と日本橋魚河岸で魚を仕入れた行商人たちが描かれています。橋の袂の左側には高札場、右側の犬がいる方は罪人のさらし場でした。もう一図「五十三次名所図会 一日本橋東雲の景」は、一般には「豎絵東海道」の愛称で親しまれています。この作品は広重が生涯に東海道シリーズを20種類以上制作した最後の作品で、安政2年(1855)7月の改印が捺された広重晩年の作品です。図は豎の構図で、はじめから画帖として売り出すことを想定しています。「保永堂版」とは違い鳥瞰図で近景は魚河岸、日本橋、倉庫、中景に江戸城、遠景に富士山の江戸の名所三点セットが定型で描かれています。

本展では、広重がはじめて東海道に取り組んだ「保永堂版東海道」と最後に制作した東海道シリーズ「豎絵東海道」の2つの東海道を前期と後期に分け、展示します。当時の旅路を楽しんでください。

【会期】前期 6月8日(金)～7月8日(日)  
後期 7月12日(木)～8月19日(日)

那珂川町馬頭広重美術館 学芸員 市川 信也

ばとうの観光写真コンテスト受賞作品  
優秀賞

花ハスの里 釜井三木さん(宇都宮市)



ミニ  
ギャラリー



揚柳観音 金子コウさん(馬頭)

96歳で仏画

仏画を描き続けて5年になる金子コウさんは96歳。「今は、お正月に飾る七福神を制作中です」とうれしそうに話していました。「花の風まつり」に開催した個展の中から一番新しい作品をご紹介します。